

# 人相書

中牟田政也

「やいやい、どしたどした」  
 黒山に飛び込んだが、弾き出された。其処此処で、荒っぽい声が聞こえる。  
 「どけどけ、見えねえじゃねえか。おい、踏みやがったな、おいこら、てめえか」  
 「んなこと知るかよ、やんのか。ってえ、源の兄貴じゃねえですか」  
 甲高い声を上げて、絞りの手拭を頭に巻いた小男が現れた。  
 「三郎てめえか、なにしゃがる」  
 「俺じゃありませんよ」  
 「ったくなんでえ。誰だよ、ほんとによお」  
 「災難でやしたね」  
 「痛えのなんの。見つけたら、たたじゃおかねえぞ」  
 左足の指に息を吹きかける。脚たちの向こうに、木の棒が見えた。

「こりゃいってえ、なんの騒ぎだよ。札が立ってるみてえだが」  
 「人相書でやすよ。なんでも昨日、丸井屋の近くで、人斬りが」  
 小男が同じ目線に下りてきた。剃り残した髭がやや青い。  
 「ほんとにかよ」  
 「へい。ただ、斬られた方も、ならず者だったようで」  
 「おめえ、読めるのか」  
 痛みは引いたが、指先はまだ赤い。  
 「さっき、前から出てきた奴に聞きやした」  
 「大工の三男だもんな」  
 「関係ないでしょうよ。それに、兄貴だって」  
 「江戸っ子には、読み書きなんざいらねえよ」  
 「ここは博多でやすが」  
 裾を払って立ち上がる。

「で、どんななんだよ」  
 「下手人は、身の丈五尺。痩せて、肌は浅黒い。目が大きく、眉は太い。すばしっこく、猿のような身のこなし」  
 「へえ」  
 頭を掻き、小男を眺める。  
 「俺あ、そいつを知ってっぞ」  
 「ほんとでやすか。どこのどいつで」  
 「俺の前にいる」  
 しばらく目を瞬かせたあと、捲し立ててくる。唾がうっとおしい。  
 「兄貴、なんてことを。あつしがやるわけねえでしょう」  
 「どうだかね。酒に酔ったおめえには、びっくりさせられるからな」  
 「んなこと言ったら兄貴だって」  
 「俺あ五尺五寸はあつからよ。それに、おめえは、ほっとけんのかよ」  
 「何をですかい」

おほん、咳払いをひとつ。  
 「いいか」  
 「弱い者が怯える傍で、ならず者はのうのうとしてやがる。与力や同心もあてになんねえ」  
 着物の袖を握ると、解れた糸がさらに延びる。  
 「こんなのってねえだろうがよ。人の道はねえのか。神も仏も、どこにもいやしねえのかよ」  
 「英雄なんてのは、お伽噺にしかいねえってのかよ」

「やいやいやいやい」  
 手拭をねじり鉢巻に変え、足を踏み鳴らす。  
 「人の恐れや悲しみを、はらしてごらんにいれやしょう」  
 「人の世のため民のため、天に代わりて悪を討つ」  
 腕まくりをした両手を、大仰に広げた。  
 「博多の国性爺たあ、ええい、この三郎左衛門のことよ」  
 「いよっ、色男」

「次幕はお白州だな、あばよ」  
 「まってくたせえ」  
 背を向けると、袖を引っ張られた。  
 「んだよ、いい具合に決まったじゃねえか。下手人もな」  
 「酔っぱらうのもいい加減にしてくたせえ」  
 「俺が真っ昼間から飲んでるとでも」  
 小男がしみじみと見つめてくる。  
 「ああ、今は茶屋の娘にお熱でやしたもんね」  
 「俺あ生まれた時から、おつるちゃん一筋よ」  
 「こないだは、蕎麦屋のおさよちゃんでしたっけ」  
 「男はうじうじ振り返らねえのよ。国学者じゃあるめえし」  
 「さすが兄貴は博識で」  
 「寺子屋免許皆伝だからな」  
 「追い出されてやしたもんね」  
 あくびをする。

「で、三郎、ゆうべは何してたんだ」  
 「ゆうべは、家にいやしたよ」  
 「ほんとにか」  
 「ええ、女房も知ってやす。そりゃまあ、ちったあ出やしたが」  
 鉢巻きを解いて、こめかみを掻く。鼻の頭がやや赤い。  
 「含みの有る言い方じゃねえか」  
 「別に、やましいことはありやせんよ」  
 「だったら、どこにいったんだよ」  
 「三ツ松屋に」  
 「なんだそりゃ」  
 「ただの飯屋でやすよ。女房のに飽きた時に、たまに」  
 「知らねえな」  
 「川向こうに、宿屋がありやしょう。そのすぐ横で、夜だけやって」  
 「あっちは行かねえからよ」  
 「兄貴のそこからは、ちとありやすからな」  
 「そりゃお前もだろ。わざわざご苦労なこって」

「しかしそんな旨えのか、その三ツ松屋」  
「まあ、そうでやすね」  
「はっきりしねえな」  
「別に、そういう訳じゃ」  
「さてはてめえ、遊郭か、もしくはほんとに下手人か」  
「いやいやなんてことを。話を大きくせんでくだせえ」  
「女房に殺される、奉行に殺される、どのみち一緒じゃねえか」  
「うめを人相書にさせたくありませんし、お白州もご免でやす」